

分科会「戦争の体験」

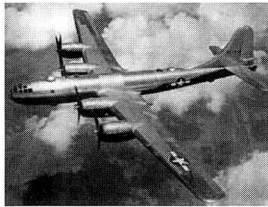
－ 富山空襲 そして終戦 －

司会・佐藤 聖 助言者・伊藤政雄

富山大空襲

日時 1945（昭和20）年8月2日
0時36分～2時27分（111分間）
爆撃機 B29・174機
死者 2,737人（地方空襲の中で最多）
負傷者 7,900人（地方空襲の中で最多）
被災人口 109,592人
全国平均を大きく上回る
焼失家屋 24,914戸（市街地の99.5%）
全国一の焼失率

1945（昭和20）年8月1日22時頃、米軍機が富山上空に現れたが、何もせず過ぎ去った。2日0時半頃、B29爆撃機の編隊が来襲した。まず照明弾を投下し、焼夷弾を多く投下するという惨い富山大空襲が開始された。



B29



上の写真は本文とは関係ありません

【竹川秀夫さんの話】（当時13歳のとき）

10年前位から、富山大空襲について調べてきました。調べて判ったことを含めて話したいと思う。

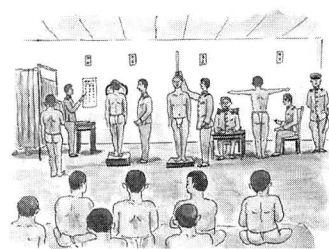
<防空演習>

住んでいた家の近くに富山盲啞学校の跡がありました。昭和7年に富山市の中心に生まれ、富山盲啞学校に通うために近くの長屋に引越して両親と姉と弟と共に生活しておりました。昭和16年、防空演習が開始されました。（例：消火訓練）学校で厳しい訓練（例：剣道、槍等）をさせられました。富山大空襲の前に、何度か授業中に何か落ちたような轟音がしたんです。破壊力のある爆弾の為、振動が激しく地面も揺れました。

<徴兵検査>

20歳以上の男子は徴兵検査を受けるという時代

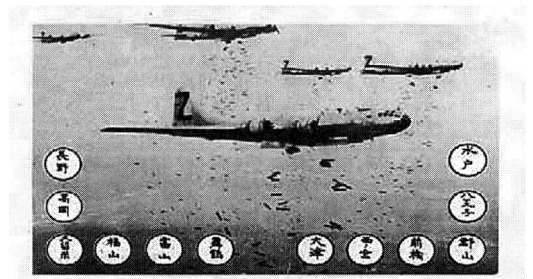
だったのです。伊藤サトさんの弟さん（富山盲啞学校卒業生）まで、通達書がきたのです。ふんどし姿になり、徴兵検査を受けていたんですが、自分の名前が言えず「耳が聞こえない者は不可」とされた結末でした。



上の絵・上の写真は本文とは関係ありません

<空襲予告ピラ>

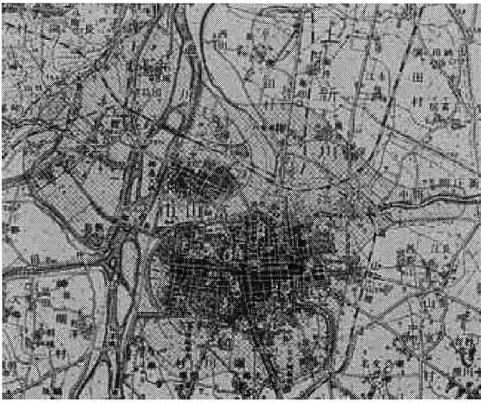
7月31日、ピラが空からばらまかれたのです。ある高校生が2枚拾い、1枚はポケットに隠して1枚は届けたんです。英語じゃなく日本語で「まもなく空襲する」と書いてあったのです。どのようにして作られたのかは分かりませんが、大変驚きました。



空襲予告ピラ

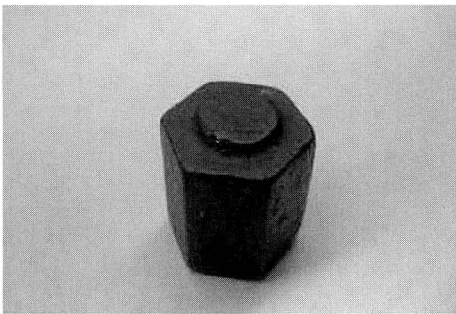
<富山を火の海に>

8月1日夜に空襲警報が鳴ったのです。布団から起き上がり防空頭巾を被って近くの防空壕へ避難したが、爆撃機の轟音が響いて来た。しかし爆撃機は爆弾を落とすことなく通り去りました。防空壕から出て「おかしいな」と思っていたら、2日午前0時半頃に再び富山に現れ、市街地を集中攻撃で多くの焼夷弾が投下され、あっという間に富山は火の海になったのです。B29は煙草の2/3の大きさに見え、次から次にB29の編隊が焼夷弾を投下し、空中で分解されあちこちにばら撒かれた。市街地の99%が焼失された。私は直ちに家族揃って三郷村という所に移り、過ごした。



<不発弾を手にして>

昭和21年10月に家を新築する際に不発弾が多く見つかりました。実物を持って来たので、見せましょう。本当は35cm程の長さがあります。欲しい人に不発弾を上げてしまいました。現在、今お見せしているモノだけとなってしまいました。凄く貴重なモノですね。



竹川秀夫氏所蔵

【伊藤サトさんの話】(当時23歳のとき)

<終戦後の暮らし>

日本が負けてから、綺麗にお化粧した女性たちがいるところに男性が誘う行為を見受けるようになりました。

何とかして生きるためにお金を稼いでいた女性もいました。私の場合は、英語で話しかけられても分かりませんし、何を聞かれても「耳が聞こえません」と答えるので、相手にされず、被害を受けることはなかったんです。家族が心配して「外に出るな」とよく言われたけど、大丈夫でした。進駐軍が引き揚げてから、だいぶ平和になりつつありました。進駐軍の中には黒人もいました。目はぎろぎろとして大きな唇をしていたので、とても怖い思いをしたわけです。

私の家は空襲に遭わなくて済んだのですが、

困ったことがありました。耳の聞こえない友達や、空腹で我慢できない人たちが私の家に来たりするんです。仕方がなくお握りを提供していました。ろう者だけ提供したんですが、他人が来られても断っていたが、脅しをかける人もいた。日本兵も「何か食べ物をよこせ!」と来たりするんですね。断ると脅かされるし、大変怖い思いをした。食糧がなくて困っている人がよく訪ねて来るので、父は「盗まれると困るし、殺されると嫌だから」と渋々と食糧を提供していました。空襲により家を失って食糧不足に苦しんでいる人たちが郊外とか田舎に食糧をもらいに行く、逆に食糧を持って来る人がいました。物々交換もありました。このような状態が1~2年続きました。

【助言者・伊藤政雄氏の話】(当時14歳のとき)

<学童疎開生活>

当時埼玉県にある寺に疎開していました。遠くから東京が燃えているのが見え、「自分の家が燃えてしまったんじゃないか?」と両親等の安否を心配しながら見ていたわけです。しばらくしたら両親が無事である連絡があつて喜んだのですが。家を失ったと知り、とても悲しかった。

<生き延びる>

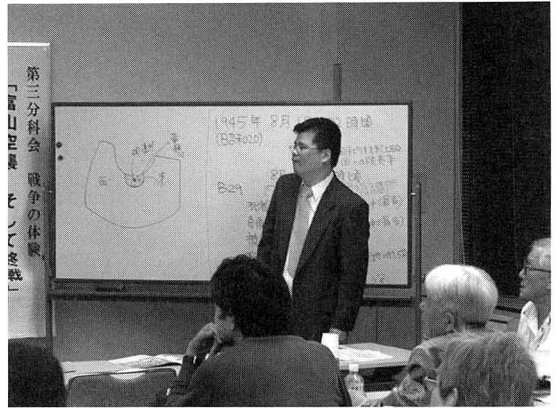
ある日、F6F戦闘機が飛んでいるのを目撃したんです。なんとそのF6Fは私に迫ってくるではありませんか!「殺されてしまう!」と感じ、私は逃げました。F6Fは私を狙って機銃掃射をしましたが、地べたにへばりついて逃げ切った経験があります。幸い標的が少しずれていたの、私は助かりました。標的が合っていたら私が死んでいたかもしれません。

「正月に家に帰ってもいいよ」といわれ、本当に嬉しくて東京に戻った時の出来事です。ある日、銀座にある映画館に入って上映開始を待っていたのですが、始まりませんでした。「何故上映しないのか?」と聞いたら「空襲警報が鳴っているから上映中止になりました」と「明日来て下さい」といわれ帰宅しました。翌日、昨日中止になった映画を見ようと映画館に行ったところ、映画館が爆撃されていました。運良く私は命拾いをしたんですね。

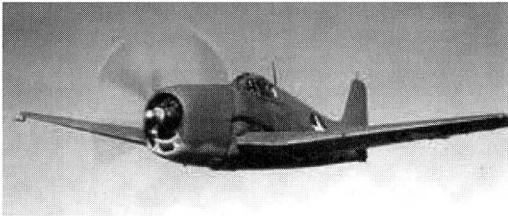
<玉音放送を目撃して>

8月15日の朝、「昼に大事な話があるから集まるように！」と言われたんです。色々な憶測が飛びかっている中、時間になって玉音放送が始まりました。ラジオの前に、私たちは先生たちの後ろに並んでいたのですが、先生たちの背中が震えているんです。何故先生たちが泣いているのか理解できませんでした。説明がなく解散したんですが、私たちはわからぬまま、時間が過ぎ去るだけでした。わけがわからず生徒たちは騒いでいます。

先生達は昨日までとはまるで雰囲気が違うのです。先生のいるところに戻って「すみませんが、どういうことだったのですか。教えてください。」とお願いしたところ、先生は机を叩きながら「日本は負けました。戦争は終わりました。」と言って号泣したのです。これで終戦を知りました。「もしかしたら自害しなくてはいけなのかな？」と聞いたら「そんな事しなくて大丈夫。好きなことをしてもいいよ。遊びに行ってもいいです。」と先生は私に言いました。



分科会「戦争の体験」の様子



F6F戦闘機

